



電気の未来を拓き、
今日のICT社会の礎を築いた多久の偉人

志田林三郎博士



しだ りんざぶろう
志田 林三郎

安政2年12月25日～明治25年1月4日。
日本の物理学者・電気工学者。日本初の工学博士であり、電気学会創設者。通信省初代工務局長。

東多久村に生まれ育った志田林三郎博士は、幼少の頃から計算能力がずば抜けて高く「神童」と言われる程でした。父を早く失い、貧しい家庭でしたが、周りの大人たちがその才能を生かせるようにと計らい、当時の邑校・東原彦舎へ入学します。

当時、東原彦舎には優れた教師たちが揃い、英語や数学など最先端の学問を教えていたようです。そして、電信の父とも言われる佐賀藩士石丸安世と出会い、電気こそ自分が進む道であると決意を固めました。

官費生として工部大学校（後の東京大学工学部）に進学し、辰野金吾など有能な学生たちがいる中、首席で卒業し、後に日本における電気工学の工学士第一号になります。

翌年、スコットランドのグラスゴー大学に留学し、ケルビン郷の奨学金を受賞し、イギリスの新聞でも賞賛されました。

帰国後も、技術官僚として電気の普及につとめ、工部大学校日本人初の教授となるなど、技術者の育成にも尽力しました。

1885年（明治18年）に『導電式無線通信』実験を成功させ、1888年（明治21年）には日本初の「工学士」となり、電気学会を創立するなど、電気界の礎を築きます。

特に博士の優れた先見性があり有名となったのが電気学会第1回通常会で演説した「将来可能となるであろう十余のエレクトロニクス技術予測」です。電気の可能性を語り、そのほとんどが現実のものとなりました。

これらの功績から電気工学の神様と言われる志田博士ですが、その才能が開花したきっかけは、周りの大人たちにより、学ぶ機会が得られたからこそです。教育を大事にした多久の風土が、志田博士の道を拓き、それが日本の電気工学の発展へとつながったのです。

多久市郷土資料館職員

し さ き え
志佐 喜栄さん



工部省工学寮での1枚。日本の精鋭たちが映っている。



2016.12 TAKU

スコットランド留学中に受賞したクレランド金賞の金メダル

故郷・多久市を想って詠んだ漢詩

思母心方切わが
旅の思ふ
笑迎我意
志田林三郎

